

琉球大学学術リポジトリ

大学生を中心にした若者の「脳死および臓器移植」に対する態度の研究（その3）

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2008-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜崎, 盛康, 田中, 朋弘, 島袋, 恒男, Hamasaki, Moriyasu, Tanaka, Tomohiro, Shimabukuro, Tsuneo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/3309

大学生を中心にした若者の「脳死および臓器移植」に対する態度の研究（その3）

浜崎盛康（法文学部 哲学）

田中朋弘（法文学部 倫理学）

島袋恒男（教育学部 教育心理学）

A Study on Attitude of the Young - especially of Students - toward Brain Death and Organ Transplantation.(3)

Moriyasu HAMASAKI (College of Law and Letters - Philosophy)

Tomohiro TANAKA (College of Law and Letters - Ethics)

Tsuneo SHIMABUKURO (College of Education - Psychology)

I 背景と目的

脳死状態の人からの臓器移植を可能にする「臓器移植法」が、1997年6月17日に成立し、同年10月16日に施行された。この法律は臓器移植による以外には助かる見込みのない患者にとっては大きな福音であったが、臓器提供者がなかなか現れずに、脳死の人からの臓器移植は実現しなかった。しかし、今年（1999年）2月28日午前、高知赤十字病院に入院していた40代の患者が法的に脳死と判定され、臓器移植法施行1年4ヶ月を経て、この患者から心臓等の臓器移植がついに実現した。提供された心臓の移植手術は大阪大学付属病院で、また肝臓は信州大学付属病院で、同夜実施された。他に、2つの腎臓と角膜も摘出され移植された。肺も移植予定であったが、臓器の状態が悪く移植されなかった。いずれも移植後の経過はほぼ順調で、心臓移植を受けた男性は5月14日、手術から75日ぶりに退院、肝臓その他の臓器の移植を

受けた患者も順次退院し、日本初の法に基づく脳死状態の者からの臓器移植はひとまず無事完了したのである。ただ、幾つかの問題も生じた。高知赤十字病院における脳死判定の手順等（無呼吸テストの順番、脳波の有無等）の問題をめぐるのは、厚生省の公衆衛生審議会臓器移植等専門委員会で適切であったか検討され、いったんは妥当であると結論されたが（5月24日）、しかし異議が出され、あらためて検討された結果、無呼吸テストの手順ミスの評価が「問題がない」から「適切ではない」に修正された（朝日新聞1999年6月21日夕刊）。また、当初患者のプライバシーを無視するかのような報道がマスコミ各社によって行われ、脳死移植における情報公開とプライバシーの保護という重要な問題が浮き彫りになった。さらに、日本臓器移植ネットワークさえも、移植を受ける患者の順番を間違え、他からの指摘で気づいて訂正するという一幕もあった。

しかし、とにかくもこのように法に基づいて脳死状態の人からの臓器移植が実際に実施されたことによって、一般の関心も一気に高まった。沖縄県内でも、日本臓器移植ネットワーク・サブセンターには、意志表示カード（ドナーカード）についての問い合わせが相次ぎ（琉球新報1999年3月2日朝刊）、また全国的にも、コンビニエンスストアや銀行等でドナーカードを配布する動きが広がり、ドナーカード所持者は確実に増えている。朝日新聞社の今年5月の調査では所持率は7%で、昨年10月の3%から大きく伸びており、世代別に見ると20代の1割強がカードを持っているとのことである（朝日新聞1999年6月14日夕刊）。

そのような脳死移植をめぐる状況が変化する中、5月12日には、未明に慶応大学病院でドナーカードを所持していた患者が法に基づいて脳死と判定され、2例目の脳死移植が実施された。心臓移植が大阪の国立循環器病センターで行われ、他に2つの腎臓の移植手術も東大医科学研究所付属病院と国立佐倉病院で行われた。さらに、6月13日には、事故で宮城県内の病院に入院していた20代の男性が法に基づいて脳死と判定され、警察の実況見分を経て、

3例目の脳死移植が6月14日実施された。心臓移植が国立循環器病センターで、また肝臓が京都大学病院で2歳の男児に、2つの腎臓が福島県立医大と仙台社会保険病院で行われた。

初の脳死移植が実現し、ひとまず順調な経過をたどったことで、短期間に2例目、3例目と続いたわけである⁽¹⁾。一般的にも、脳死状態の人からの心臓等の臓器移植について、受け入れる雰囲気は広まっており、定着のきざしが見えてきたというところであろうか。3例目の臓器提供者がドナーカードに署名したのも今年4月であり、厚生省や日本臓器移植ネットワークは、3例目までの状況から見て、今後も月1回ぐらい提供があってもおかしくないとしている（朝日新聞1999年6月14日夕刊）。しかし、それにしても、やはり慎重な意見も依然根強い。特に、3例目の宮城県内の病院は、脳死判定および移植の手順を定めた「脳死判定・臓器摘出マニュアル」を、実際には男性が病院に運ばれた後の11日に作成したにもかかわらず、内部に配布された文書中では策定日を6月1日とするなど、臓器移植を前提にした動きが優先されたのではないかと思わせる面もあり、実際には準備の遅れも目立つこととなった。また、そのような脳死判定や臓器移植の実施に伴う問題だけではなく、そもそものところ、「脳死は人の死であるか」ということについてさえ、依然として議論の余地があり、臓器移植先進国のアメリカでも否定的な（しかも十分考慮に値する）論文が新しく出る状況なのである⁽²⁾。臓器移植法は、法施行後3年をめどに再検討することになっており、今後とも状況を注意深く見ていく必要があるだろう。

さて、我々の今回の研究報告は前々回の「大学生を中心にした若者の「脳死および臓器移植」に対する態度の研究（その1）」および前回の「大学生を中心にした若者の「脳死および臓器移植」に対する態度の研究（その2）」⁽³⁾に続いて、2度行った調査のうちの第1回目についてであるが、その最後の部分を扱うものであり、第1回目の調査についての報告はひとまずこれで完結する。

今回の報告で特に焦点を当てて、解明を試みたのは次の諸点である。

まず1つ目の課題は、脳死と臓器移植の問題を念頭に置きつつもひとまずこれを離れて、現代の若者の靈魂観、宗教観の一端を明らかにすることである。現在日本は第3次の宗教ブームを迎えているとも言われ、1996年の調査では、227,558の宗教団体があり、信者数は207,759,000人⁽⁴⁾である（『第48回日本統計年鑑』、1999年、総務庁統計局）。伝統的な神道、仏教、キリスト教に加えて、19世紀の初め頃に新宗教として、天理教、金光教等が、また第2次大戦の前後には、創価学会、生長の家、立正校正会、PL教団、世界救世教等が生まれている。そして、1970年代半ば以降に発展した教団が新新宗教とも呼ばれ、エホバの証人、真如苑、阿含宗、世界基督教統一神霊協会、世界真光文明教団、崇教真光、ジー・エル・エー総合本部、オウム真理教（現在は宗教法人の資格を失っている）、幸福の科学、大山祇命神示教会等がある（『新新宗教と宗教ブーム』島蘭進、岩波ブックレットNO. 237）。

以上のように数多くの宗教団体があるが、実際どの程度の割合の若者が、特定の宗教団体に属しているのだろうか。また、靈魂の死後の存続を信じている者はどの程度おり、さらに輪廻を信じている者はどの程度いるのだろうか。今回の報告における一つ目の大きな関心は、これらの諸点を知ることにある。それによって、現代の日本の若者が、宗教や靈魂に対して持っている考え方の一端を明らかにしたい。

2つ目の課題は、靈魂と宗教に関するこれらの事柄と、脳死と臓器移植に対する態度との関係を明らかにすることである。そこには何らかの関連性があることが予想されるが、統計学的にこの点を明らかにした研究はおそらくあまりない。

本文中で示したように、宗教団体によっては、脳死と臓器移植について、明確な判断を下している。したがって、脳死と臓器移植の問題を考える上で、宗教的な要素も考慮に入れる必要が生じる可能性があるのである。靈魂の死後の存続を認めるかどうかということも、この問題にやはり何らかの影響を

及ぼしそうである。そのような問題意識に基づいて、具体的には、靈魂の死後の存続を認めるかどうかという質問16と、脳死は人の死であるかという質問3および脳死の人からの臓器移植の可否を問う質問6を、それぞれクロス集計し、 χ^2 テストによって関連性を調べる。同様に、輪廻を信じるかという質問17と今の質問3および質問6を、それぞれクロス集計し、 χ^2 テストによって関連性を調べ、また、特定の宗教を信じているかという質問18と質問3および質問6をそれぞれクロス集計し、 χ^2 テストによって関連性を調べる。それによって、若者において、靈魂に対する考え方や宗教との関わりが、脳死と臓器移植の問題とどう関連しているかを明らかにしたい。

II 方法

すでに述べたように、調査は2度行われたが、今回の研究報告は1回目の調査についてであるので、以下の調査の対象等の項目に関しても1回目についてだけ述べておきたい。

1) 調査の対象

調査の対象者は、琉球大学の学生420人、沖縄県立看護学校の学生139人、沖縄県主催による看護教員養成講習会の受講者45人、計604人である。

2) 調査実施の方法

琉球大学の学生の場合には、教室でアンケート用紙に記入してもらった。沖縄県立看護学校の学生の場合には、同校に依頼して、同校教員によって教室で学生へのアンケートが実施された。看護教員養成講習会の場合、講習会の会場で受講者に調査用紙への記入をしてもらった。

3) 調査期間

調査実施の期間は、1997年5月23日から6月9日の間である。

4) 調査票

調査項目は、付表に示す通りである。

5) 結果の分析方法

調査の分析では、結果は大きく4つの部分に分けられた。第1部は脳死と臓器移植に関する「知識・関心」について、第2部は「脳死への態度」、第3部は「臓器移植への態度」、第4部は「この問題と、靈魂観、宗教(信仰)との関係」について分析をし、必要と思われる項目についてはクロス集計をし、 χ^2 テストを行った。なお、今回の研究報告は、このうち第4部をまとめたものである。

III 結果と考察

4 靈魂観および宗教との関わりと「脳死と臓器移植」

a-1 死後の靈魂の存続について(質問16)

質問16では、「肉体が減んでも靈魂は存続すると思いますか」という設問によって、死後の靈魂の存続についてどう考えるかを尋ねた。表1はその結果を集計したものである。

表1 靈魂は死後存続するか

はい	どちらとも言えない	いいえ
208 (34.7)	282 (47.0)	110 (18.3)

単位：人 ()内：%

人が死んで肉体が減んでも、靈魂は存続すると答えた者(はい)は、604人中208人(34.7%)、「どちらとも言えない」は282人(47.0%)、否定した者(いいえ)は110人(18.3%)である。死後の靈魂の存続を認める者が34.7%、つまり約3人に1人いる。この割合は、どう評価すべきであろうか。

他の調査を見てみると、NHK世論調査部は日本人の意識構造について1973年に第1回目の調査を行い、以来5年ごとに同一の調査用紙、調査方法

によって、調査を続けている。公表された最新のデータは1993年のものであるが、（『現代日本人の意識構造』第四版、日本放送協会、1998年）、その中で日本人の宗教に関する意識についても調査がなされている。「宗教とか信仰とかに関係することがらで、あなたが信じているものがありますか」と尋ね、次の1～8の中から幾つでも選ぶという形式である。1「神」、2「仏」、3「聖書や経典などの教え」、4「あの世、来世」、5「奇跡」、6「お守りやおふだなどの力」、7「易や占い」、8「宗教とか信仰とかに関係していると思われることがらは、何も信じていない。」この中で、4「あの世、来世」を信じるかどうか、我々の質問16と重なる。NHK世論調査部の結果は、「あの世、来世」を信じる者は、1973年が7%、1978年が9%、1983年が12%、1988年が同じく12%、1993年が13%である。1973年には7%の者が「あの世、来世」を信じているだけであったが、年を追う毎に少しずつ増え、1993年にはほぼ倍近い13%になっている。この結果を年齢別に見ると、93年の調査では、1953年以前に生まれている世代で「あの世」を信じている人の割合は7～11%の間であるが、1958年生まれの人は16%、1963年生まれは23%、1968年生まれは26%、1973年生まれは20%、1977年生まれは21%である。このように年齢別に見ると、1960年代半ば以降に生まれた若者の世代で、「あの世、来世」を信じる者が多く、20%台の数値である。我々の調査の主要な対象は大学生であり、1980年前後に生まれた世代である。このグラフにはこの世代は直接は含まれていないが、1993年時点では、1968年生まれは25歳、1973年生まれは20歳、1977年生まれは16歳であり、単純に年齢だけの比較ではあるが、我々の調査対象の年齢層とほぼ近い。NHKの調査では、この年齢層の者は、先の全体の割合13%よりも高く、それぞれ26%、20%、21%なのである。我々の調査の割合はそれよりもさらに高く、34.7%の者が死後の靈魂の存続を信じていると答えているのである。このように比較してみると、特に若者においては、データのある1973年以来魂の死後の存続（あの世、来世）を信じる者は、徐々にではあるが確実に増えてい

ると言えよう⁽⁶⁾。

a-2 「死後の靈魂の存続」と「脳死は人の死であるか」(質問16と質問3)

靈魂の死後の存続を信じるかどうかということと、脳死は人の死であると考えられるかどうかということとは、何か関連性があることが予想されようが、次にこの点について検討してみよう。そのために、今の質問16と「脳死は人の死だと思いますか」という質問3とをクロス集計し、検討した。それをまとめたものが、表2である。

表2 「靈魂の死後の存続」と「脳死は人の死であるか」

質問16 \ 質問3	死である	どちらとも言えない	死ではない
はい	63 (30.43)	102 (49.28)	42 (20.29)
どちらとも言えない	93 (32.98)	163 (57.80)	26 (9.22)
いいえ	50 (45.45)	49 (44.55)	11 (10.00)

単位：人 ()内：% $\chi^2=19.455$ $p<0.001$

χ^2 テストの結果、この表の人数の偏りは有意である ($\chi^2=19.455$ $df=4$ $p<0.001$)。つまり、靈魂の死後の存続を信じている者(「はい」)は、否定ないし判断に迷っている者(「いいえ」ないし「どちらとも言えない」)に比べて、質問3で脳死を人の死と認めない傾向があり(42人、20.29%)、靈魂の死後の存続に関して「どちらとも言えない」とした者は、質問13でも「どちらとも言えない」を選ぶ傾向があり(163人、57.80%)、また靈魂の死後の存続を否定した者は、質問13では脳死は「人の死である」を選ぶ傾向があるのである(50人、45.45%)。靈魂が死後も存続するとすれば、脳死状態に陥っても靈魂は存在していることになる。そうすると、脳死状態であるということと存続している靈魂との関連性は気になるところということになるかもしれない。

大学生を中心にした若者の「脳死および臓器移植」に対する態度の研究（その3）（浜崎・田中・島袋）

a-3 「死後の靈魂の存続」と「脳死の人からの臓器移植」（質問16と質問6）

次に、靈魂の死後の存続を信じるかどうかということと、脳死の人からの臓器移植との関係はどうなっているのだろうか。この点を調べるために、質問16と「脳死状態の患者から臓器移植を行ってもよいと思いますか」という質問6とをクロス集計し、検討した。表3はその結果をまとめたものである。

表3 靈魂の死後の存続と脳死の人からの臓器移植

質問6 質問16	1*	2	3	4	5
はい	14 (6.76)	102 (49.28)	56 (27.05)	29 (14.01)	6 (2.90)
どちらとも 言えない	30 (10.68)	107 (38.08)	104 (37.01)	30 (10.68)	10 (3.56)
いいえ	14 (12.73)	39 (35.45)	42 (38.18)	14 (12.73)	1 (0.91)

単位：人（ ）内：% $\chi^2=15.934$ $p<0.05$

*1：積極的に行うべき

2：どちらかというで行うべき

3：どちらとも言えない

4：どちらかと言うと行うべきではない

5：絶対に行うべきではない

χ^2 テストの結果、この表の人数の偏りは有意である（ $\chi^2=15.934$ $df=8$ $p<0.05$ ）。つまり、死後の靈魂の存続を信じている者は、そうでない者に比べて、「どちらかというで行うべき」を選ぶ傾向がある程度認められる（102人、49.28%）。また、靈魂の存在を信じていない者および迷っている者は、脳死状態の人からの臓器移植に積極的であるが（14人、12.73%および30人、10.68%）、同時に「どちらとも言えない」を選んでいる者も42人（38.18%）および104人（37.01%）おり、これも相対的に多いと言える。前項の質問16と質問3とのクロス集計では、靈魂の死後の存続を信じる者は脳死は死ではないを選ぶ傾向があったが、ここでは靈魂の死後の存続を信じる者も臓器移植には慎重ながら一応賛成の傾向なのである。これは、おそらくは、脳死状態の人からではあっても、臓器移植によって確かに命を救われる人がいるわけで、それを考えると「どちらかというで行うべき」という形で

賛成するということであろう。いわば、脳死状態の人からの臓器移植に対する消極的賛成派ということになるだろう。

b-1 靈魂の輪廻について（質問17）

質問17では、「あなたはいわゆる「靈魂の輪廻」を信じますか」という設問によって、靈魂の輪廻についてどう考えるか尋ねた。表4はその結果を集計したものである。

表4 靈魂の輪廻を信じますか

はい	どちらとも言えない	いいえ
136 (22.5)	302 (50.0)	162 (26.8)

単位：人 （ ）内：%

靈魂の輪廻を信じると答えた者（はい）は、604人中136人（22.5%）、「どちらとも言えない」は302人（50.0%）、信じないと答えた者（いいえ）は162人（26.8%）である。22.5%もの人が輪廻を肯定し、50%の者も否定するのではなく、迷っているというのは、輪廻の考え方に対して若者は比較的抵抗感を持っていないと言えよう。この点については、もっと肯定的な調査もある。渡辺恒夫は、その著『輪廻転生を考える』（講談社、1996年、p. 26）で、宗教と社会学会による調査を紹介している。それによると、大学生ら3,773人のうち52%が輪廻を肯定しているとのことである。また渡辺本人の調査でも「まったく賛成」と「どちらかといえば賛成」を合わせると51%の者が輪廻に対して肯定的であるとのことである。我々の調査では輪廻を信じると答えた者は22.5%であるわけだが、もし我々も「どちらかといえば信じる」のような選択肢を設けていたら、合わせた肯定的な者はもう少し増えたかもしれない。

この質問17と前節の質問16との関連を次に見てみよう。表5は両者をクロ

ス集計したものである。

表5 靈魂の存続と輪廻（質問16と質問17）

質問16 \ 質問17	はい	どちらとも言えない	いいえ
はい	115 (55.29)	69 (33.17)	24 (11.54)
どちらとも言えない	20 (7.12)	222 (79.00)	39 (13.88)
いいえ	1 (0.91)	11 (10.00)	98 (89.09)

単位：人（ ）内：％ $\chi^2=400.665$ $p<0.001$

χ^2 テストの結果、この表の人数の偏りは有意である（ $\chi^2=400.665$ $df=4$ $p<0.001$ ）。つまり、靈魂の死後の存続を信じる者は靈魂の輪廻も信じる傾向があり（115人、55.29%）、その判断に迷っている者は靈魂の輪廻に関しても迷う傾向があり（222人、79.00%）、靈魂の死後の存続を否定する者は靈魂の輪廻も否定する傾向があるのである（98人、89.09%）。死後の靈魂の存続を信じるかどうかということと、その輪廻を信じるかどうかが対応関係にあるのは、当然考えられることであると言えよう。

b-3 靈魂の輪廻と「脳死は人の死であるか」（質問17と質問3）

靈魂の輪廻を信じるかどうかということと、脳死は人の死であるかどうかということは、どのような関連性があるだろうか。この点を調べるために、質問17と質問3とをクロス集計し、検討した。表6はその結果をまとめたものである。

表6 靈魂の輪廻と「脳死は人の死であるか」

質問17 \ 質問3	死である	どちらとも言えない	死ではない
はい	39 (28.89)	71 (52.59)	25 (18.52)
どちらとも言えない	104 (34.44)	167 (55.30)	31 (10.26)
いいえ	62 (38.27)	77 (47.53)	23 (14.20)

単位：人（ ）内：％ $\chi^2=7.988$ $p<0.10$

χ^2 テストの結果、この表の人数の偏りには有意な傾向がある ($\chi^2=7.988$ $df=4$ $p<0.10$)。つまり、質問17で靈魂の輪廻に関して「どちらとも言えない」を選んだ者および「いいえ」を選んだ者は、脳死を人の死と認める若干の傾向があり (104人、34.44%および62人、38.27%)、輪廻を信じている者は脳死を人の死であるとは認めない若干の傾向があるのである (25人、18.52%)。「靈魂の死後の存続を信じるかどうか」ということと、「脳死を人の死と認めるかどうか」ということの間には、a-2で見たように、はっきりした関連性が認められたが、ここでも有意な傾向という程度ではあるが、やはり「輪廻を信じるかどうか」ということと「脳死を人の死であると考えるかどうか」ということとの間には関連性が認められるのである。

b-4 靈魂の輪廻と「脳死の人からの臓器移植」(質問17と質問6)

靈魂の輪廻を信じるかどうかということと、脳死の人からの臓器移植の可否との関連性はどうかであろうか。この点を調べるために、輪廻に関する質問17と臓器移植の可否に関する質問6とをクロス集計し、検討した。表7はその結果をまとめたものである。

表7 靈魂の輪廻と臓器移植

質問6 質問17	1*	2	3	4	5
はい	10 (7.35)	60 (44.12)	36 (26.47)	25 (18.38)	5 (3.68)
どちらとも 言えない	35 (11.63)	121 (40.20)	108 (35.88)	28 (9.30)	9 (2.99)
いいえ	13 (8.07)	67 (41.61)	58 (36.02)	20 (12.42)	3 (1.86)

単位：人 ()内：% $\chi^2=12.575$ n.s.

*1：積極的に行うべき

2：どちらかという行うべき

3：どちらとも言えない

4：どちらかと言うと行うべきではない

5：絶対に行うべきではない

χ^2 テストの結果、この表の人数の偏りは有意ではない ($\chi^2=12.575$ $df=$

8 n.s.)。つまり、質問17で靈魂の輪廻に肯定的な者（「はい」）が、そうでない者に比べて、質問6で臓器移植に関する特定の選択肢を選ぶ傾向はないのであり、これは「どちらとも言えない」を選んだ者および「いいえ」を選んだ者についても同様である。前項において、今の質問17と質問3とをクロス集計し検討した結果は、靈魂の輪廻と脳死の人からの臓器移植との間には有意な傾向があるということであったが、さらに、臓器移植についての判断ということになると、特定の傾向はなくなるということである。これもおそらく、すでに述べたように、脳死の人からであれ、臓器移植によって確かに命を救われる人がいるということを考えたとき、問題はやはりそう単純ではないということであろう。

c-1 宗教への信仰（質問18）

質問18では、「あなたはある特定の宗教を信じていますか」という設問によって、宗教への信仰について尋ねた。表8はその集計結果である。

表8 宗教を信じていますか

はい	どちらとも言えない	いいえ
27 (4.5)	55 (9.1)	521 (86.4)

単位：人（ ）内：%

何らかの特定の宗教を信じているとはっきり肯定した者（はい）は604人中27人（4.5%）であり、「どちらとも言えない」は55人（9.1%）、はっきり「いいえ」と否定した者が圧倒的に多く521人（86.4%）である。特定の宗教への信仰に関して「どちらとも言えない」と答えた者が正確にはどのような状態にあるのかは分からないが、おそらく一般的に考えれば、ある特定の宗教に何らかの関わりを持っていたり、あるいは関心を持っていたりするものの、その宗教をはっきり信じているというところまでは至っていないと

いうように解釈できよう。それにしても、「はい」と「どちらとも言えない」を合わせても82人(13.6%)であり、圧倒的多数の521人(86.4%)は明確に特定の宗教への信仰を否定している。初めに見たように1996年の調査では、日本の宗教の信者の総数は、207,759,000人である。日本の総人口よりも多くなっているこの数字を考えると、今回の我々の研究報告の結果はかなり少ないように思われる。さらに調査が必要であるかもしれない。

c-2 宗教への信仰と靈魂の死後の存続(質問18と質問16)

さて続いて、この宗教への信仰とその他の項目との関連を調べていこう。まず、靈魂の死後の存続との関連を見てみたい。つまり、ある特定の宗教を信じているかどうかということと、靈魂の死後の存続を信じるかどうかということとの間にはどんな関連性があるだろうか。この点を調べるために、今の質問18と質問16(「肉体が減んでも靈魂は存続すると思いますか」)をクロス集計し、検討した。表9はその結果を集計したものである。

表9 宗教への信仰と靈魂の死後の存続

質問18 \ 質問16	はい	どちらとも言えない	いいえ
はい	19 (70.37)	6 (22.22)	2 (7.41)
どちらとも言えない	19 (34.55)	27 (49.09)	9 (16.36)
いいえ	170 (32.82)	249 (48.07)	99 (19.11)

単位：人 ()内：% $\chi^2=15.275$ $p<0.01$

χ^2 テストの結果、この表の人数の偏りは有意である($\chi^2=15.275$, $df=4$, $p<0.01$)。つまり、ある何らかの宗教を信じている者は、そうでない者に比べて、靈魂の死後の存続を信じる傾向があり(19人、70.37%)、宗教への信仰に関して迷っている者とそれを否定する者は、靈魂の死後の存続に関しても、迷っていたり否定的であったりするわけである。ほとんどの宗教で死後の靈魂の存続は説かれており、両方の間に関連性があるのは当然のこと

であると言えるかもしれない。

c-3 宗教への信仰と靈魂の輪廻（質問18と質問17）

次に、宗教への信仰と靈魂の輪廻について見てみたい。この点を調べるために、今の質問18と靈魂の輪廻について問う質問17とをクロス集計し、検討した。表10はその結果をまとめたものである。

表10 宗教への信仰と靈魂の輪廻

質問18 \ 質問17	はい	どちらとも言えない	いいえ
はい	12 (44.44)	6 (22.22)	9 (33.33)
どちらとも言えない	16 (29.09)	30 (54.55)	9 (16.36)
いいえ	108 (20.85)	266 (51.35)	144 (27.80)

単位：人 （ ）内：％ $\chi^2=14.938$ $p<0.01$

χ^2 テストの結果、この表の人数の偏りは有意である（ $\chi^2=14.938$ 、 $df=4$ 、 $p<0.01$ ）。つまり、特定の宗教を信じている者は、そうでない者に比べて、靈魂の輪廻を信じる傾向がある（12人、44.44%）とともに、輪廻を否定する傾向も見られる（9人、33.33%）。これはおそらく、宗教によっては（たとえばキリスト教）輪廻を説かないものもあり、したがって、宗教を信じていても輪廻は信じないという者がいる可能性は大いにあるということだろう。また、反対に、宗教を信じていない者は、信じている者に比べて、「どちらとも言えない」を選ぶ割合が相対的に高くなっている（266人、51.35%）。

c-4 宗教への信仰と「脳死は人の死であるか」（質問18と質問3）

さて、では次に、宗教への信仰と「脳死と臓器移植」の関係について見てみよう。まず、宗教への信仰と脳死の関係であるが、この点を調べるために、宗教への信仰を問う質問18と「脳死は人の死であるか」を問う質問3とをク

ロス集計し、検討した。表11はその結果をまとめたものである。

表11 宗教への信仰と「脳死は人の死であるか」

質問18 \ 質問3	質問3		
	人の死である	どちらとも言えない	人の死ではない
はい	5 (18.52)	13 (48.15)	9 (33.33)
どちらとも言えない	17 (30.91)	34 (61.82)	4 (7.27)
いいえ	185 (35.58)	268 (51.54)	67 (12.88)

単位：人 ()内：% $\chi^2=11.430$ $p<0.05$

χ^2 テストの結果、この表の人数の偏りは有意である ($\chi^2=11.430$, $df=4$, $p<0.05$)。すなわち、何らかの特定の宗教を信じている者は、そうでない者に比べて、脳死は人の死ではないとする傾向があり (9人、33.33%)、反対に宗教を信じていない者は、脳死を人の死であると認める傾向があるのである (185人、35.58%)。ただ、質問18で「はい」、「どちらとも言えない」、「いいえ」のどれを選ぶかに関係なく、質問3では、50%前後の者が「脳死は人の死であるか」に関して「どちらとも言えない」を選び、迷っているということも、この場合特徴的であろう。ともあれ、一般にはやはり、宗教を信じている者は、そうでない者に比べて、脳死は人の死ではないと考える傾向があるのである。

c-5 宗教への信仰と「脳死の人からの臓器移植」(質問18と質問6)

さて最後に、ある特定の宗教への信仰と「脳死の人からの臓器移植の可否」の間の関連性について見てみたい。この点を調べるために、今の質問18と「脳死の人からの臓器移植の可否」を問う質問6とをクロス集計し、検討した。表12はその結果をまとめたものである。

表12 宗教への信仰と脳死移植の可否

質問6 質問18	1*	2	3	4	5
はい	0 (0.00)	10 (37.04)	6 (22.22)	10 (37.04)	1 (3.70)
どちらとも 言えない	5 (9.09)	18 (32.73)	26 (47.27)	4 (7.27)	2 (3.64)
いいえ	53 (10.23)	220 (42.47)	171 (33.01)	60 (11.58)	14 (2.70)

単位：人（ ）内：% $\chi^2=21.142$ $p<0.05$

χ^2 テストの結果、この表の人数の偏りは有意である（ $\chi^2=21.142$ 、 $df=8$ 、 $p<0.05$ ）。つまり、宗教を信じていない者は、脳死の人からの臓器移植に積極的に賛成する傾向があり（53人、10.23%）、迷っている者は臓器移植に関しても迷っている（26人、47.27%）。他方、何らかの特定の宗教を信じている者の場合は、「どちらかというところで行うべきではない」（10人、37.04%）と「どちらかというところで行うべき」（10人、37.04%）が同じ割合であり、賛成と反対に分かれていると言えよう。これはどう考えたらよいのだろうか。

実は、脳死の人からの臓器移植に関して、宗教によっては、はっきりした判断を下している。たとえば、キリスト教のカトリックは、「死後、他者を助ける為に臓器を提供することは、すぐれた隣人愛の行為である。ただし、遺体への尊敬の念は必要。」という見解であり、プロテスタントもほぼ同じである。また、日本インド仏教会は、「脳死についてのコンセンサスがない現状では、時期尚早。しかも他者の臓器をもらって延命をはかる思想は仏教とは本来相容れない。」としており、大本教は「脳死は個体死にあらず。臓器はその人固有のもので、他者への提供は許されない」等である⁽⁶⁾。したがって、ある特定の宗教を信じているかどうかということが、「脳死の人からの臓器移植の可否」についての判断に何らかの影響を与えていることが考えられる。ここで、宗教を信じる者が賛成と反対に分かれたことも、そのことと関連がある可能性があるのではないだろうか。

IV 要約と展望

初めに述べたように、我々のアンケートは2度行われた。今回の研究報告と前回および前々回の研究報告は、1回目についてのものであり、今回の報告で1回目についてはひとまず完了する。1回目のアンケートを実施したのは、1997年5月23日から6月9日の間であったが、この期間はまさに国会で臓器移植法が、成立をかけて審議されている真っ最中であった。本研究報告(その1)の「2a 人間の死を法律で決めることについて」で述べたように、初めに提出された中山案に対案(金田案)が出て、衆議院本会議で対案を否決、中山案を可決したのが1997年4月24日である。そして、中山案を修正して現在の形の臓器移植法が成立したのが1997年6月17日である。それ以来、日本における「脳死と臓器移植」をめぐる状況は大きく変化した。今回の研究報告の初めに述べたように、法律は成立しても実際にはなかなか条件を満たす臓器提供者が現れず、脳死の人からの臓器移植は実現しないまま、1年4ヶ月が経過した。しかし、今年(1999年)2月28日ついに条件を満たした脳死のドナーが現れ、臓器移植法に基づく日本で初の脳死の人からの臓器移植が実現したのである。

その後、立て続けに2例目、3例目と続き、脳死移植は日本でも定着のきざしが見えてきたように思われる。確かに、脳死の人からの心臓等の臓器移植によって命を救われる人があるわけで、そのことを考えると脳死移植を否定することはできない。しかし反面、脳死移植が行われるということは、誰かが脳死状態になり、そして、臓器移植を前提として、その人が死んだと判定されるということである。脳死移植は、一方では人の命を救うものであるが、他方では人の死を前提にしなければ成り立たない、ということをも我々は十分考慮に入れなければならないだろう。

最後に、我々のこの第1回目のアンケートを全体的に簡単にまとめておこう。アンケートは、まず「脳死と臓器移植に対する関心と知識」について調

べた。臓器移植に関する法案が国会で審議されているということは、604人中579人（96%）が知っており、関心は高かった（質問1）。しかし、脳死についての正しい知識を持っている者は13%にすぎず（質問14、質問15）、多くの人が正確な知識を持たずにこの問題について判断していたのである。すなわち、脳死を人の死としてよいかということについては半数以上の者が迷っているが（質問3）、その判断は必ずしも脳死についての正しい知識に基づいていないということ（質問3と質問14）、また、脳死の人からの臓器移植に肯定的な者は多数派になりつつあるが（質問6）、この判断も必ずしも脳死についての正しい知識に基づいてはいないこと（質問6と質問14）が明らかになった。法律で人の死を決めることに対しては、56%の者が迷っており、28%の者は明確に否定し、「決めてよい」としたのは16%にすぎず、やはりある種の抵抗感があることが分かった（質問2）。また、脳死を人の死であると認める者は臓器移植にも肯定的であるということ（質問6と質問3）や、脳死を人の死とせず臓器移植をすることに対しては否定的な者が6割を越えるという結果も出た（質問7）。脳死判定に関しては、一般的には、患者本人と家族および医師の協議で決めるべきだという意見が68%で多数であり（質問4）、自分の場合も脳死判定を望む者が61%と多く（質問5）、また脳死になったとき自分の臓器の提供を望む者も59%と多かった（質問11）。

臓器の提供を受けたいかどうかということに関しては、他に助かる方法がなければ、自分の場合にも臓器の提供を受けたいとする者が55.6%で多数であり（質問8）、肉親の場合にも臓器提供を受けたいとする者が65.2%で多数である（質問9）。またこの傾向は脳死を人の死と考える者ほど高いということも明らかになった（質問3と質問8、質問3と質問9）。脳死の人からの臓器移植に肯定的な者は、自分が臓器提供を受けることも肯定的であり（質問6と質問8）、肉親が臓器提供を受けることにも肯定的である（質問6と質問9）。臓器を提供することについて見てみると、自分が脳死状態になったら臓器を提供すると答えた者が59.2%で多数であり（質問11）、肉親

の臓器を提供することについては、本人が生前に臓器提供の意志を表明していれば、それを尊重するとする者が82.4%で多数であった（質問12）。また、脳死を人の死と考える者は、自分自身の場合も肉親の場合も臓器提供に肯定的であった（質問3と質問11、質問3と質問12）。さらに、必要な場合には臓器提供を受けたいという者は、自分の臓器を提供することにも肯定的であるという結果が見られた（質問8と質問11）。

靈魂の死後の存続に関しては、34.7%が肯定し、18.3%が否定した（質問16）。死後の靈魂の存続を認める者は、脳死を人の死とは認めない傾向があるが（質問16と質問3）、脳死移植に関しては、慎重ながらも肯定する傾向がある（質問16と質問6）という結果が出た。輪廻については、肯定した者は22.5%であり、否定した者が26.8%、半数の者は「どちらとも言えない」を選んだ（質問17）。靈魂の死後の存続を信じる者は、靈魂の輪廻に関しても肯定的である（質問16と質問17）。靈魂の輪廻を認める者は脳死を人の死とは認めない若干の傾向があるが（質問17と質問3）、さらに臓器移植についての判断ということになると、「靈魂の輪廻を信じるかどうか」ということと「脳死の人からの臓器移植を認めるかどうか」ということは関連性がなかった（質問17と質問6）。宗教への信仰については、ある特定の宗教を信じていると答えた者は4.5%にとどまった（質問18）。特定の宗教を信じている者は靈魂の死後の存続を信じる傾向があり（質問18と質問16）、また靈魂の輪廻も信じる傾向が見られた（質問18と質問17）。宗教を信じている者は脳死を人の死ではないとする傾向がある（質問18と質問3）。宗教を信じていない者は脳死の人からの臓器移植を肯定する傾向があるが、信じている者は脳死移植に関して賛成と反対に分かれていた（質問18と質問6）。靈魂の死後の存続を信じる者は脳死移植に関しては慎重ながらも肯定的であるが、輪廻を信じる者は脳死移植に関して特定の傾向を示さず、特定の宗教を信じている者は脳死移植に関しては傾向が肯定的な者と否定的な者との二つに割れているのである。このように見てみると、脳死の人からの臓器移植は、や

はりそれによって実際に生命が助かる人がいるのであり、単純に割り切れない面を持つと言えよう。

それにしても、初めの方で明らかになったように、多くの若者は脳死についての正確な知識を持たずに、「脳死が人の死であるか」、「脳死の人からの臓器移植は認められるか」等について判断しており、これは大きな問題であろう。ことは文字通り人間の生死にかかわるのであり、脳死の知識の普及が求められる。この正確な知識ということは、脳死を人の死であると認める人が臓器を提供したいという傾向および提供を受けたいという傾向を持つということを考えてときにも重要なことである。この問題についてのしっかりした教育と議論が、なおいっそう求められると言えよう。

注

- (1) さらに、6月24日早朝、大阪府吹田市の府立千里救命救急センターに入院していた50代の男性患者が、法に基づいて脳死と判定され、4例目の脳死移植が行われた。しかし、心臓と肺は医学的理由から移植は見送られ、肝臓と2つの腎臓が摘出された。腎臓は特に問題なく移植された。肝臓は当初からその状態が移植に適するかどうか微妙であったが、信州大学医学部付属病院で生後4ヶ月の女兒（劇症肝炎で移植を受けなければ長くは生きられない）に移植するということが決まり、準備が進められた。しかし、女兒の開腹も始まったところで、その肝臓が脂肪肝で移植に適さないということが判明し、移植は土壇場で中止され、脳死移植の厳しさを浮き彫りにする結果となった。
- (2) Robert D. Truog, 'Is It Time to Abandon Brain Death?' , *Hastings Center Report* 27, no. 1, 1997. 我が国でも、たとえば、澤田愛子は、臓器移植法施行後に出版したその著『今問い直す 脳死と臓器移植』（東信堂、1998年10月）において、Truogにも言及しつつ問題をトータルに検討し、脳死を人の死とすることには否定的な意

見を述べている (p. 128)。

- (3) 「大学生を中心にした若者の「脳死および臓器移植」に対する態度の研究(その1)」は、「人間科学」(琉球大学法文学部人間科学科紀要)第2号、1998年9月、1ページから29ページ、「同(その2)」は「人間科学」(琉球大学法文学部人間科学科紀要)第3号、1999年3月、39ページから56ページにそれぞれ掲載。
- (4) 信者の総数が日本の総人口を上回っているのは、寺院の檀徒と神社の氏子などの重複による。
- (5) NHK世論調査部が公表している最新の調査の年1993年と、我々の調査の年である1997年との間には、日本の宗教を考える上で大変な事件が起こった。1995年3月20日に、オウム真理教によると見られる地下鉄サリン事件が発生したのである。この教団は他にも多くの殺人事件や重大事件を引き起こしていたと考えられ、社会に大きな衝撃を与えた。この一連の事件は少なくとも一時的には、宗教そのものに対してマイナスのイメージを生み出した。しかし、我々のデータとNHK世論調査部のデータを比較すると、本文で述べたようなことが言えることになろう。それにしても、オウム真理教によると見られる一連の事件の影響が全くないということも考えにくく、さらに検討を要するところであろうか。
- (6) 以上、各宗教の見解については、『バイオエシックス入門』〔第二版〕(今井道夫、香川知晶編、東信堂、1995年)中の「6 脳死と臓器移植」(澤田愛子)115ページによる。他に、『脳死』A. Earl Walker, M. D.、太田富雄訳、メディカル・サイエンス・インターナショナル、1987年、138ページから141ページ参照。

【付表】 調査用紙

脳死と臓器移植についてのアンケート調査

学部

学科

学年

性別（丸で囲んでください） 女 男 年齢 歳 出身都道府県

以下の質問に答えてください。移植する臓器の種類が問題になると思う場合は、主に心臓を念頭に置いて答えてください。なおこのアンケートは、全体の傾向を知るためのものであり、あなた個人に迷惑がかからないように処理されます。

1. 脳死を人の死とする臓器移植法案が国会で審議中であることを知っていますか。
(1) はい (2) いいえ
2. 人の死を法律で決めることについてどう思いますか。
(1) 決めてよい (2) どちらとも言えない (3) 決めるべきではない
3. 脳死は人の死だと思いますか。
(1) 人の死である (2) どちらとも言えない (3) 人の死ではない
4. 脳死判定を行うか否かは、誰が決めるべきだと思いますか。
(1) 医師 (2) 患者本人と家族
(3) 患者本人・家族・医師の協議

5. あなた自身の場合に、あなたは脳死判定を希望しますか。
(1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ
6. 脳死状態の患者から臓器移植を行ってもよいと思いますか。
(1) 積極的に行うべき (2) どちらかというで行うべき
(3) どちらとも言えない (4) どちらかというで行うべきではない
(5) 絶対に行うべきではない
7. 脳死を人の死とせずに臓器移植を行ってもよいと思いますか。
(1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ
8. もしあなたが病気になり、脳死状態の患者からの移植によってしか助かる見込みがない事態に陥ったとしたら、あなたは臓器移植を希望しますか。
(1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ
9. もしあなたの身近な人（肉親）が病気になり、脳死状態の患者からの移植によってしか助かる見込みがない事態に陥ったとしたら、あなたはその肉親への臓器移植を希望しますか。
(1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ
10. 「8で『いいえ』あるいは『どちらとも言えない』を選び、かつ9で『はい』と答えた人」はその理由を簡潔に書いてください。
-
-
11. 自分が脳死状態になった場合、臓器を提供したいと思いますか。
(1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ

大学生を中心にした若者の「脳死および臓器移植」に対する態度の研究（その3）（浜崎・田中・島袋）

12. 身近な人（肉親）が脳死状態になり、本人が臓器提供の意思を事前に表明している場合に、提供に同意しますか。

- (1) 同意する (2) どちらとも言えない (3) 同意しない

13. 「11で『はい』を選び、かつ12で『同意しない』と答えた人」はその理由を簡潔に書いてください。

14. 「脳死状態」と「植物状態」の違いを知っていますか。

- (1) はい (2) いいえ

15. 14で「はい」と答えた人は、その違いを簡潔に書いてください。

16. 肉体が滅んでも靈魂は存続すると思いますか。

- (1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ

17. あなたはいわゆる「靈魂の輪廻」を信じますか。

- (1) はい (2) どちらとも言えない (3) いいえ

18. あなたはある特定の宗教を信じていますか。

- (1) はい (2) どちらとも言えない いいえ

ご協力ありがとうございました。

琉球大学法文学部人間科学科人間行動講座（哲学・倫理学）